

英国でのくらし with COVID-19

東京農業大学 秋山 聡子

1. はじめに

日本家政学会の会員の皆様、はじめまして。東京農業大学応用生物科学部栄養科学科の秋山聡子と申します。2020年10月から1年間、本学の依命留学制度を利用し、英国に在ります University of Reading (レディング大学) に留学させていただきました。時期をご覧になってお気付きの方もいらっしゃると思いますが、日本でも多く報道されていた、あのナショナルロックダウンを経験してまいりました。現地での研究課題は「ピクルス中のポリフェノール量と組成の分析」でしたが、COVID-19の影響でそもそも研究室に入室できない日々が続き、計画していた実験の半分も遂行できずに帰国しました。留学を終え、まず初めに思いつくことは「不完全燃焼」ですが、この時期だったからこそその体験もあり、学びの多い1年となりました。そこで今回は、私が英国で過ごした1年間で経験したこと、感じたことを時系列に記させていただきますと思います。

2. 出鼻をくじかれた日本出国

当初、私の留学期間は2020年4月からの1年間でした。ビザも取得して出発まであと1週間！というところで本学の判断により、無期限の延期となりました。ホスト教授と、住む場所が決まっていたので大家さんに事情を説明し、いつ渡英できるか分からない状況でも待っていただけるとのお返事をいただきました。そして、パッキングを終えた荷物から取り出した服を着て出勤し、オンライン授業とその準備に勤しむ日々となりました。

前期授業が終了する8月頃、少し状況が落ち着きました。現地も1st ナショナルロックダウンが明け、ホスト教授も大家さんも受け入れてくださるとのご連絡をいただ

けたこと、年度内の出発であれば再申請の必要がないこと、そして何より一度高まった留学への思いが冷めやらぬ自分がいたことが重なり、10月の出発に向けて二度目のビザ申請を含む諸々の手続きを行いました。正直、この出発時期を逃したら、留学が中止になるのではという思いもありました。

こうして迎えた出発日の10月2日、定刻に出発したまでは良かったのですが、ロシア辺りで飛行機の気象レーダーシステムにトラブルが生じ、羽田空港にUターンすることになりました。航空会社が急遽開けたラウンジと、辛うじて営業しているフードコートおよび免税店が各1箇所の空港内で、なかなか辿り着くことができない英国に思いを馳せながら、約8時間待機。結局、日付が変わって3日に改めて出発することになり、必然的に英国への入国日が変更となるので、陰性証明や保険をはじめとする諸契約の変更手続きに追われながらの渡航となりました。

3. 英国での生活がスタート

現地で住む場所は既に決めていたので、入国後は、大家さんのお宅に英国らしい小雨の中、直行しました。借りたフラットは大家さんのお宅の裏庭にありました。フラットとは、英国英語の単語で、アパートやマンションという意味です。大学の寮を利用することも視野に入れていましたが、大学関係者以外、特にレディングに長年住まわれている方とお知り合いになりたかったため、レディング大学の関係者にご紹介いただいた、大学近くのワンルームタイプ（現地では studio と言う）のフラットに住むことにしました。日本を出国する前から住む場所が決まっていたことは、生活を整えるに当たりとてもありがたかったです。

こうして、やっとの思いでレディングに到着したその日に、英国の COVID-19 新規感染者数が1万人を超えました¹⁾。日本の新たな感染者数が約500人/日²⁾ だった時期です。英国の国土面積は、24.3万 km²³⁾ で日本の約2/3、人口は、2020年の段階で6,708万人⁴⁾ で日本の約1/2

Satoko AKIYAMA

東京農業大学応用生物科学部栄養科学科 准教授
 [著者紹介] (略歴) 東京農業大学大学院農学研究科食品栄養学専攻博士後期課程修了、博士(食品栄養学)、京都大学大学院農学研究科博士研究員、東京農業大学短期大学部栄養学科助教、同応用生物科学部栄養科学科助教を経て、2020年4月より現職。
 [専門分野] 給食経営管理、食品機能。

です。比例して重症者数も増加していたので、人口と新規感染者数との割合からみても英国の医療機関がパニック状態に陥っていたことはご想像できるかと思います。英国には、すべての人間に平等な医療サービスを提供することを理念とし、1848年に始動した国営医療保険制度、NHS (National Health Service)⁵⁾があります。NHSには16歳から年金受給年齢まで加入の義務があり、加入者から所得に応じて徴収される保険料を財源として運営されています。保険料は支払うので厳密には無料ではありませんが、NHSのもとでは誰でも、一部の例外を除き、診療の際にお金を支払う必要はありません。この制度は英国に6か月以上滞在する外国人にも適用されます。NHS制度においては、日本の様に患者の判断で自由に直接病院へ出向くことはありません。予め地元の一般開業医であるGP (General Practitioner) に登録を済ませおき、どのような症状でも医師の診察が必要な場合は、予約をしてからGPの診察を受けます。その後、必要と判断された場合にはこのGPからの紹介という形で大きな病院や専門医の治療を受けることになります。つまり、耳鳴りがして直接耳鼻科に行くことも、ものもらいができて直接眼科に行くこともなく、まずはGPに行き診察してもらいます。COVID-19が疑われる場合もGPに行く必要があります。GPがひっ迫していたことは言うまでもありません。私もGP登録を済ませましたが、後のワクチン接種以外、幸いにもお世話になることはありませんでした。

私が生活したレディングは、ロンドンから西に約60 km、オックスフォードから南東に約40 kmに位置しています。ハブ駅もあり交通の便がとてもよく、ロンドンには急行列車に乗って25分で行くことができます。通常であれば、終業後にふらっとロンドンまで、といった生活を送ることができたようですが、1st ナショナルロックダウン後とはいえ自治体毎に行動規制がありましたし、感染率を鑑みるとレディング外に出歩く気にはなれず、レディングを知ること徹底することとし、人と会わないように朝晩に近所を散策してどこに何かがあるか、市内バスはどのように乗るのか、生活を整える日々でした。先に1st ナショナルロックダウンがあったせいなのか、元々オンライン化が進んでいたのかは分かりませんが、各種オンラインショップが充実しており、品物によっては即日配送もしていただけるので、物の調達には困りませんでした。

大学は教育機関として稼働していましたが、研究室に入室できる人数が制限されており、事前に申請し、大学が許可した研究内容に携わる必要最低限の人物しか入室が認められない状況でした。修学期間が決められているドクターやマスターといった学生の研究が優先され、私のような学生でない研究員は、実験のために入室する許

可が下りずにもどかしい思いをしていました。ホスト教授はそんな私を不憫に感じたのか、時には大学構内にある池の周りを散歩しながら、またある時には外のベンチに座ってタブレットを用いながら、ディスカッションの機会を設けてくださいました。どんどん厳しくなる行動規制を厳守しつつ、友人もでき、レディングでの生活に馴れてきた10月31日の夜、11月4日から2nd ナショナルロックダウンに突入することがボリスジョンソン首相から発表されました。

4. 2nd ナショナルロックダウンとワクチン接種

英国まで留学に来て、ロックダウンを経験することになるとは想定外でした。しかし、ロックダウン中の生活は、行動規制が厳しかった入国してからの1か月間の生活とほぼ変わりませんでした。1st ナショナルロックダウンでは、医療機関以外の施設は閉鎖され、ほぼ人が歩いていない状況だったそうですが、2nd ナショナルロックダウンでは、生活必需品を販売している小売店は営業が許可されており、先にも記したオンラインショップも営業していました。そのため買い溜めの必要もなく、必要に応じての買い物に出歩くことができました。私も狭いフラット内に終日居るのが苦痛となり、ロックダウン中は、生活必需品の買い物と最低限の運動のための外出が許可されていたので、買い溜めはせず、毎日スーパーマーケットに食材を調達しに行き、ついでに公園や大学の敷地内を30分ほど散歩していました。外出の許可は誰かに得るものではありませんが、規制外の行動は警察の取り締まりにより、罰則(罰金)が科せられていました。実際に住宅街でなく商店が並ぶ地区に行くと、警察が何人もパトロールしていました。住民はどこかピリピリ緊張しており、お互いを疑うような行動も見受けられ、学生が近所の方に通報されたりしていました。その学生は、自室でオンラインゲームをしていただけなのですが、騒がしい音が聞こえてきているので、「あの部屋には何人も人がいる」と勘違いされたものでした。

2nd ロックダウンが明けたのは12月3日でしたが、地域別の行動規制があるため、生活環境に変化はありませんでした。ほぼ同時期の12月8日より、英国が世界初となるコロナワクチン接種を開始しました。最初の対象者は、医療・介護従事者、介護施設入居者、80歳以上で、徐々に対象年齢階級が下げられ、実際に私が1回目のワクチンを接種したのは5月13日でした。当時、1回目のワクチン接種の普及を優先させるため、2回目の接種は2か月後がルール化されていました。

5. クリスマスとサポートバブル制度

2nd ナショナルロックダウンが明けた頃、次の感染者

数のピークは1月15日になるという予測がされていました。これはクリスマスを重ねる国だからこそその理由で、クリスマスに家族に会うために、帰省などで大多数の人間が移動し人と接触するためとされていました。そこで、レディング大学は授業がオンラインであるため、学生の帰省を目的とした移動を12月16日までに済ませるよう学生に通告しました。16日までに移動を済ませることで、クリスマスまでに2週間確保できる、つまり、もし移動中に感染しても、症状が治まるとされている2週間を一人隔離状態で過ごし、クリスマスは家族と過ごせるという逆算に基づいています。クリスマスが年間行事で最も重要で、12月に入った途端、街も人も様子が変わりました。クリスマスカードを送って、家をデコレーションして、家族のプレゼントを準備して、帰省して・・・クリスマスを大切にすることは知っていましたが、感染することを覚悟してまで重要視することに驚きしかありませんでした。クリスマスホリデーを過ごしている間の行動規制は、地域別の階層的アプローチが導入され、居住する地域別に規制が設けられました(表参照)。レディングは当初、Tier2に該当していましたが、12月17日にTier3になり、ロックダウンとはほぼ同じ規制となりました。

さらに、24～26日のクリスマス期間は規制を緩和するとされていましたが、感染者数が増え続けたことにより、19日からさらに厳しい制限となるTier4が設けられ、レディングも該当となりました。Tier4では、25日のみ他世帯(ただし6人を上限)との交流を認めるものであり、日常の社交も公共の屋外での交流は他世帯の一人としか会えないという制限でした。宿泊施設は閉鎖となり、居住する地域外への移動は認められないものでした。

私はサポートバブル制度⁶⁾を利用して、現地ですぐに友人とクリスマスを過ごすことができました。サポートバブルとは、単身者または18歳未満の子どもがいる一人親を対象に、孤独感を和らげることを目的に、自宅と別の一世帯で同じ世帯で暮らしているかのように行動できる空間のことです。ただ一方的にナショナルロックダウンを宣言し、行動を規制するだけでなく、孤独感を和らげるというメンタルケアを目的とした施策を打ち出すのはヨーロッパならではの感心しました。

6. クリスマス後の3rd ナショナルロックダウン

全世界が未曾有の打撃を受け、誰もが初めて経験する環境に身を置いているので、国や地域のルールが二転三

表 COVID-19 tier system (階層警戒システム)

	Tier1	Tier2	Tier3
社交	屋内・屋外で6人まで。	屋内で他の世帯との社交禁止。 屋外で6人まで。	屋内・ほとんどの屋外で他の世帯との社交禁止。 公共の屋外(公園等)に限り6人まで。
外食	テーブルサービスのみ。 PM10時ラストオーダー・PM11時閉店。	実質的な食事を提供する場合に限り、アルコールの提供可。 PM10時ラストオーダー・PM11時閉店。	持ち帰り、配達、ドライブスルーを除き閉鎖。
小売り	営業可		
娯楽施設	営業可		屋内は閉鎖
理美容	営業可		
移動	可能なら徒歩、自転車で。 仕事、教育、医療、ユースサービス、介護を除きTier3への移動は避ける。	可能な限り減らす。 仕事、教育、医療、ケアを除きTier3への移動は避ける。	仕事、教育、医療、ケアを除き他地域への移動は避け、回数を減らす。
宿泊	同一世帯、サポートバブルまたは6人以内であれば可能。	同一世帯、サポートバブルであれば可能。	仕事、教育の理由で必要な場合を除き、地元地域以外で不可。
宿泊施設	営業可		仕事を目的とする宿泊、自宅に帰れない人のための宿泊以外は閉鎖。
仕事	在宅勤務を行うべき。		
教育	開校		
宗教施設	6人を超えて交流しないこと。	他世帯と交流しないこと。	
冠婚葬祭	結婚式、披露宴は15人まで。 葬式は30人まで。		結婚式は15人まで。 披露宴は禁止。 葬式は30人まで。

出典：英国政府ポータルサイト (GOV.UK) より (著者訳)

転するのはやむを得ないことです。置かれた環境下で自分が進められることを粛々と進めるのみと考え、ロックダウンおよび行動規制中は、日中はオンラインでゼミやディスカッションを繰り返し、レビューワークを進め、夕方になったら生活必需品の買い物と公園での散歩に繰り出す日々でした。英語力が低い私は、PCの画面越しのやり取りに毎回、悪戦苦闘し、どうしても伝わらない場合はチャット機能を利用して乗り越えました。また、日本と英国の9時間の時差を調整し、本学の研究室の打ち合わせや、学生の研究指導もオンラインで頻繁に行いました。コロナ禍で習得したオンラインツールを活用し、英国に居ても日本の様子を気軽に伺い知ることができ、有意義な情報交換の時間となっていました。

そして、クリスマスに家族と過ごすための移動や、盛大なクリスマスでの会食は、予想通り感染者数を跳ね上げました。想定内ではありましたが、急遽、1月5日から3rd ナショナルロックダウンに突入することが発表されました。地域差が無い全国的なロックダウンも3回目となると、誰も落ち込まず、淡々と対応しているように見受けられました。3rd ロックダウンでは義務教育機関も基本、封鎖となりました。小中学校は保護者がキーパーソン（医療従事者および教育関係者）の場合のみ登校が許可されますが、それ以外はオンライン授業です。大学ももちろん封鎖でオンライン授業となっています。クリスマスホリデーが明けても、結局、研究室には入室できない状況でした。

7. 兆しが見えた COVID-19 RESPONSE-SPRING 2021発表

3rd ナショナルロックダウンはいつ明けるのか明言されないままロックダウンが続いていました。ロックダウン中の2月22日に、政府からロックダウンの緩和に向けたロードマップを含む「COVID-19 RESPONSE-SPRING 2021」⁷⁾が発表され、研究室での実験を遂行できる兆しが見えてきました。発表されたロードマップの主な内容は以下の通りです。

ステップ1（3月8日～）

- ・全ての小学校・中学校・高等学校や専門学校、一部の大学にて対面授業の再開。
- ・同じ世帯やサポートバブルの人、または別世帯の一人と一緒に、屋外でのお茶やピクニック等のレクリエーションが可能。

ステップ2（3月29日～）

- ・6人または2世帯までの屋外での社交が可能。
- ・テニスやバスケット等の屋外スポーツ施設が再開され、正式に組織化された屋外スポーツに参加可能。
- ・「Stay at Home」の方針の終了。ただし、ロックダウン

の規制は残る。

ステップ3（4月12日～）

- ・必要不可欠でない小売店、美容院等のパーソナルケア施設、図書館やコミュニティーセンター等の公共施設の再開。
- ・動物園やテーマパーク等の屋外のアトラクションや施設の再開。
- ・車に乗ったままの映画上映やイベントが可能。
- ・ジムやプール等の屋内レジャー施設が再開。ただし、個人または同世帯で訪問すること。
- ・パブやレストラン等のホスピタリティ施設は、屋外での営業が可能。ただし、注文や飲食はテーブルで行うこと。
- ・別世帯と屋内施設を共有しない貸別荘のような自己完結型の宿泊施設が再開。

ステップ4（5月17日～）

- ・屋外でのほとんどの社会的接触の規制が解除。ただし、30人まで。
- ・屋外での劇場公演や屋外での映画館が再開。屋内では6人、または2世帯まで。
- ・屋内でのパブやレストラン等のホスピタリティ施設、屋内での映画館や幼児向け遊具施設等の娯楽施設、その他の宿泊施設、屋内での大人のグループスポーツや運動教室の再開。
- ・1,000人または収容可能人数の半分のいずれか低い方までの屋内会場において、大規模な公演やスポーツイベントが可能。4,000人または収容可能人数の半分のいずれか低い方までの屋外会場での大型公演やスポーツイベントが可能。

ステップ5（6月21日～）

- ・全ての社会的接触の制限を解除する方針。
- ・ナイトクラブを再開し、大型イベントや公演の制限を解除。

尚、この緩和に向けたロードマップを遂行するには、

- ・ワクチン展開プログラムが成功裏に継続していること。
- ・ワクチンが、接種した人々の入院および死亡率低下に十分効果的であること。
- ・NHSにとって持続不可能な圧力となるような入院患者数の急増がなく、感染率が抑えられていること。
- ・新たな変異種によってリスク評価が根本的に変更されないこと。

以上が条件として挙げられていました。このようにロードマップには、集える人数だけでなく屋内外かが明確に記され、具体的にピクニックといった言葉も記載されていました。英国では雨が多い印象が強いと思いますが、実際の年間降水量は日本の約1/2であり、特に3月～9月の差は顕著です⁸⁾⁹⁾。それでも雨が多いイメージがあるの

は、1日の中で天気が変わりやすく数回分かれて小雨が降る点と、夏に比べて極端に日照時間が短い冬に夏よりも雨が降る点が影響しているのかもしれませんが。晴れている時は少しでも日光を浴びようとする人が多かったように感じられ、公園や川沿い、ビーチだけでなく、大学内のちょっとした芝生スペースでピクニックを楽しむ方々を何度も見かけました。また、今回は記載しませんが、ロードマップには宗教活動に関する人数制限も記されていました。英国の総人口に占める移民の割合は13.79%¹⁰⁾です(日本は2.19%)¹¹⁾。実際に大学内外で様々な国出身の方にお会いしましたし、都会に行けば行くほど、様々な人種の方を見かけました。それぞれバックグラウンドもアイデンティティも異なりますので、活動内容や人数を詳細に記載し、どこまでの行動が許されるのか明確に示されているのだと思いました。

8. レディング大学の研究室に通える喜び

そして待ちに待った3月8日、行動規制が緩和され、別世帯の方と1対1では会えるようになり、29日からは屋外で6人までの社交が可能になりました。ロードマップが示されてからは、緩和される日付が待ち遠しくなり、一日一日が以前よりも長く感じられました。また、3月28日からサマータイムとなりました。研究活動は引き続きレビューワークがメインでしたが、実験室を使用するための講習会が再開され、講習を受けるために大学に行きました。

レディング大学は学科により建物が異なるのですが、私がお世話になった食品栄養科学科の建物は教員の個室フロアと実験室フロアが分かれています。実験室は各教員(ラボチーム)の主となる実験室がありますが、基本、どの研究者も共通で使用します。そこで、実験室を使用する際のルールが厳密化されており、使用前には必ず講習を受けなくてはなりません。その講師は一人のテクニシャンリーダーであり、他に講師はいません。コロナの影響で受講者を何人もという訳にはいかず、1対1での講習となりました。廃棄物の処理の仕方、試薬の取り扱い、実験室での身支度等、基本ルールの講習を受けました。高額な実験機器も共通で使用することになるので、使用前には各機器を取り扱えるテクニシャンの講習を受ける必要がありました。また、以前は実験室の一画が研究者や学生のデスクワークスペースとなっていたのですが、この時は撤去されており、デスクワークは各自宅で進めることがルール化されていました。

行動規制が段々と緩和される中、実験室の講習以外は、ホスト教授との個人ディスカッション、ラボチームのミーティング、学科のゼミやセミナーと、何らかのオンラインミーティングが平日ほぼ毎日あり、他者との交流

が増えました。実験ができないまま半年が経ってしまいましたが、4月19日からの夏学期の開始に合わせて大学内の設備も規制が緩和され、学内に自分専用のデスクワークスペースも確保することができ、毎日通うことが許可されました。研究グループのミーティングも6人までならオフラインでできるので、大学院生とは直接会ってミーティングをしました。

夏を目の前にして、オリンピック開催を控えていた日本での感染拡大のニュースが英国にも届いていました。英国では、失業者や廃業者が増えたとしても、厳しいロックダウンを行い、その結果、劇的に感染者数が減少しました。また、ワクチン開発に資金を使い、開発と接種を進めました。日本はオリンピックを開催することも控えているのになぜ英国のような厳しいロックダウンをしなかったのか、他の国の方は疑問を抱いているようで、私が日本人だと分かると、なぜだ?なぜだ?と初対面でも質問攻めされてしまいました。また、食品栄養科学科内のスタッフ、学生は、私に会うと日本食の質問をしてくれました。レディング市内にはいくつかの日本食レストランがありますが、食べるだけでなく作れるようになりたかったようです。実際に海苔巻き作り方を教える機会もいただき、様々な国の留学生と意見交換できることはとても貴重な時間でした。

一方、2月に発表されたロードマップでは、6月21日から制限なしになる予定でしたが、6月14日に規制解除は7月に延期されることが決定されました。英国で発見された変異株だけでなくインド株の感染が増えたためでした。しかし、規制内での大規模な公演やスポーツイベントが可能となっていたので、2年ぶりのUEFA EURO 2020、Wimbledonや2021 British & Irish Lions Squadなど各種スポーツの世界大会が開催され、スタジアムだけでなくパブや野外スクリーン等でも観戦することができました。

9. コロナ関係の規制全解除

留学も残り約2か月となる7月21日、政府によるコロナ関係の規制が全面解除となりました。ボリスジョンソン首相の会見によると、「1日の感染者数は5万人を超えているが、重症化率が著しく下がり、それに伴い死者数が減少しており、感染と重症化及び致死は無関係であると判断した。」とのことでした。これはワクチン接種の効果とされており、事実、7月の初めには成人(18歳以上)の87%が1回目の接種を、68%が2回目の接種を終えていました。一方、公共交通機関の乗り物、大学や室内の店舗などでは独自のルールとして、マスクの着用を呼び掛けており、対応しない者にはサービスを提供しないことを宣言していたので、英国でもマスク着用が日常化し

てきたように思えました。しかし、たった1か月経った頃には、室内店舗の店員、バスの運転手、電車の車掌等、マスクを着用せずに働いており、マスク未着用者へのサービス提供拒否を掲げる業種もほぼなくなっていました。この頃はしばらくの間、旅行できなかった分、雨でもビーチに出かけたり、多めに休暇を取って旅行したりすることを revenge trip と名付け、多くの人が長めのサマーホリデーを取得し、居住地域から遠出をして旅行を楽しんでいました。

私は、大学の規制解除に伴い、予約をせずに研究室を利用できるようになっていたのも、これまで実験を進められなかった分、巻き返しを！と思い研究室に通っていました。数に限りのある機器を使用するには予約や調整が必要となりますが、実験台で器具と試薬を使っている分には自分のペースで実験を進められる環境となっていました。実験の合間の話題は東京オリンピックでした。英国は馬術競技が盛んで、団体も個人もメダルを取り、多くの方が興味を示していました。馬術が話題になる度に、「私の大学の道の向かいが会場なのよ！」とちょっと得意気に世田谷区にある馬事公苑の説明をしました。テレビでも会場の背景に見慣れた景色が映り、懐かしい気持ちになりました。実験を進めたいので長期休暇は特別取得しませんでした。毎週末の休みに遠出を計画し、英国中を駆け巡るとも充実した2か月間を過ごしていました。英国と称する一つの国ですが、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドと地域分けされており、日本人の私にとっては不思議な感覚でした。それぞれに歴史や特色があり、出身者には誇りがあります。旅先で出会った方々は、観光丸出しの私に優しく話しかけてくださり、様々なことを教えてくれました。

北緯51.5度に位置するレディングで迎えた英国の夏は本当に短かったです。4時頃日が昇り、22時頃に日没となるので、夏自体は短いですが、1日が長く感じられ、過ごしやすかったです。この頃は感染者数ではなく、重症化率や死亡率が注目されており、感染者数は多くてもそれらはほぼ底辺横ばいを示していました。日本のインフルエンザのような感覚で受け止められていたようでした。大学の実験室を共有する学生の中には、宗教上の理由や、感染しても若年のため重症化しない自信から、ワクチン接種を拒否する人も多くいました。そのためか、規制解除となっても、年齢が高い教職員はリモートで学生指導を行い、学生との距離を保っていました。ホスト教授もほぼ work from home 状態で、私との週に1回のディスカッション日だけ出勤してくださっていました。研究活動において学生ファーストではありますが、教職員側の安全の確保の権利（人権）が明確に担保されていました。

10. 名残惜しくも帰国

留学も残り1か月となった頃、できるだけ実験を進めようと大学に通っていましたが、相変わらず機器の予約が取りにくい状況でした。学期の切れ目となる9月は、8月に続き夏季休暇を取る人が多いと予測していたのですが、院生の論文の締め切り時期と重なるため、今まで実験ができなかった学生達が追い込みで実験をしたのが原因でした。また、一時帰国していた留学生が自国から戻ってきたこともあり、研究室は活気を取り戻した分、人口密度が高くなっていました。私もできる限りの予約をして実験を進めましたが、日本に宿題として持ち帰ってきた課題は山積みです。

11. 終わりに

私が留学したレディング大学は、1892年に University College Reading として創設しました。50以上のアカデミックスクールと学科を有し、1万5千人以上の学生が在籍しています。世界各国からの留学生も多く在籍していました。大学の敷地はとても広く、キャンパス内には池や公園、パブやアジアンスーパーマーケットもありました。レディングには日本人も多く在住しており、レディング大学に来る日本人留学生向けにルームシェアをする方が何名もおられ、日本人コミュニティが充実していました。「せっかく海外に留学したんだから、日本人とは関わらず、海外の環境下に身を置いた方がいい」とよく耳にしますが、人と会うことさえ制限された私には、そんな余裕はありませんでした。申し訳ないですが、頼れる日本人の方にしっかり甘えさせていただきました。英国に居られるのは決められた1年間。その間に研究を進められないことへの不安や、フラット内だけで過ごす虚無感は一生涯忘れられません。多くの方々のサポートや励ましがあって気持ちを切り替え、落ち込むことなくリモートワークを乗り越えることができました。

オンラインでできる限りのことをする、外出は許される範囲内を満喫する、と心に決め、仕事もプライベートも本気で取り組みました。研究室での研究は、同じ機器を使うインドネシア人のマスターの学生への指導を頼まれるまでになりました。自分が計画していた実験すべてを遂行することはできませんでしたが、今後は共同研究することを約束していただきましたので、英国と日本で研究を発展させたいと思っています。

また、ナショナルロックダウンを経験し乗り越えたからこそ、同じ時間を共に過ごした方々と絆が生まれた気がします。元々、英国人には困っている人には声をかけて助けようとする国民性がありますが、どこに行っても「何人?」「いつからいるの?」「いつまでいるの?」の3

つの質問をされました。日本人であること、2020年10月から1年間しか滞在できないこと知ると、相手は必ず残念がりながら、本来の英国を知ってほしかったとおっしゃってください、優しく様々なことを教えてくださいました。もちろん、自国に対してのプライドがあるからこそその対応ですが、それと同時に、「一緒にロックダウンを乗り越えた仲間だね。」とも言ってくれました。自分を受け入れてくれた気がしてうれしかったです。

1年間の留学を終えて、研究活動も英国生活の経験も不完全燃焼でしたが、英国でコロナ禍を過ごしたこと、レディング大学関係者はもちろん現地在住の方々と出会えたことは、私の研究活動だけでなく人生にとっても大きな財産となりました。

最後になりましたが、留学を支援して下さった東京農業大学の皆様、快く送り出してくださった栄養科学科の先生方、未曾有の状況にも関わらず私を受け入れてくださった Jeremy P.E. Spencer 教授、そして、英国で、日本で、物理的にも精神的にも支えてくださった皆様に厚く御礼申し上げます。

文 献

- 1) GOV.UK. “Coronavirus (COVID-19) in the UK”. <https://coronavirus.data.gov.uk/> (閲覧 2022.3.16).
- 2) 厚生労働省. “新型コロナウイルス感染症について”. <https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/kokunainohassei-joukyou.html> (閲覧 2022.3.16).
- 3) 外務省. “英国 (グレートブリテン及び北アイルランド連合王国)”. <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/uk/data.html#section1> (閲覧 2022.3.16).
- 4) 前掲 3)
- 5) NHS. “NHS services”. <https://www.nhs.uk/nhs-services/> (閲覧 2022.3.16).
- 6) GOV.UK. “Making a support bubble with another household”. <https://www.gov.uk/guidance/making-a-support-bubble-with-another-household> (閲覧 2022.3.16).
- 7) GOV.UK. “COVID-19 Response-Spring 2021 (Roadmap)”. <https://www.gov.uk/government/publications/covid-19-response-spring-2021> (閲覧 2022.3.16).
- 8) 気象庁. “観測開始からの毎月の値 (降水量)”. https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/monthly_s3.php?prec_no=44&block_no=47662&year=&month=&day=&view=p5 (閲覧 2022.3.16).
- 9) Met Office. “Climate change continues to be evident across UK”. <https://www.metoffice.gov.uk/about-us/press-office/news/weather-and-climate/2021/climate-change-continues-to-be-evident-across-uk> (閲覧 2022.3.16).
- 10) United Nations. “Population Division”. <https://www.un.org/development/desa/pd/> (閲覧 2022.3.16).
- 11) 前掲 10)